一五〇〇年の伝統産地

実用的な芸術品として約1500年近く親しまれてきた越前漆器。
産地である福井市鯖江市のうるしの里・河和田地区では、
伝統の技を受け継ぐ現代の匠たちが、
新しい歴史を刻み続けています。

越前漆器のはじまり

越前漆器の歴史は、約1500年前。第26代継体天皇（450～531）が皇子だった頃、片山集落（現在の鯖江市片山町）の職人（塗師）に、壊れた冠の傷を修理するよう命じたのがきっかけです。職人が漆で直した冠に、黒塗りの椀をそえて献上すると、皇子はその美しい仕上がりにとても感動し、片山集落での漆器づくりを奨励しました。これが越前漆器のはじまりとされています。

漆の樹液を受ける小桶
（500年前のもの）

また、かつて越前には大勢の「漆かき（漆の樹液を採取する職人）」がいて、1750年頃から盛んになり、もっとも多い時期には、全国の漆かきの半数を占める800人もの職人が活躍していたと言われています。日光東照宮建立の際には、徳川幕府から大量の漆液の採集を命じられたという逸話からも、その技術の評価の高さがうかがえます。

明治時代の漆かき作業風景

こうした職人たちの存在と漆器づくりに適した風土が、越前漆器を一大地場産業に育てる基盤となりました。

地場産業としての発展

漆器づくりが奨励され、河和田地区の片山で作られるようになった椀は「片山椀」と呼ばれ、室町時代頃から仏事に使われるようになりました。江戸時代末期になると京都から蒔絵の技法が伝わり、実用に適した丈夫な下地が自慢だった越前漆器に、華やかな装飾が施されるようになりました。

さらに、明治の半ばには、ロクロを使って作る椀類の「丸物」に加えて、板を組み合わせて作る重箱や膳などの「角物」の製法も伝わりました。こうして製品が多様化し、1900年代になると河和田地区全体に生産エリアが広がったことから、「片山椀」は「河和田塗り」と呼ばれ、販路の拡大とともに、いつしか「越前漆器」として広く知られるようになりました。

朱漆を練る器具

沈金を施したお盆